



まなざしの建築
自身の存在を意識させる対他存在

c 都市から建築を見た際にも壁のエッジや窓が作り出す開口を2つ捉えることができ、まなざしを感じる



a 自分の自宅に他者のようなまなざしを向ける空間にいることを想像する



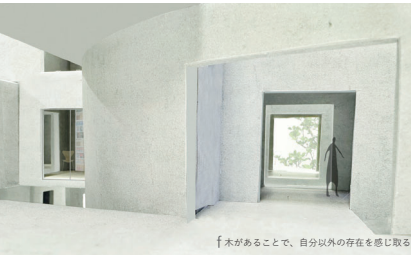
b 光まで視線が通る共有室



d 住戸のアラサから上って来る面影のアルの壁を見る



e 開口の先に自分の住戸の外壁と、他者の外壁を両方みる



f 木があるので、自分以外の存在を感じ取る



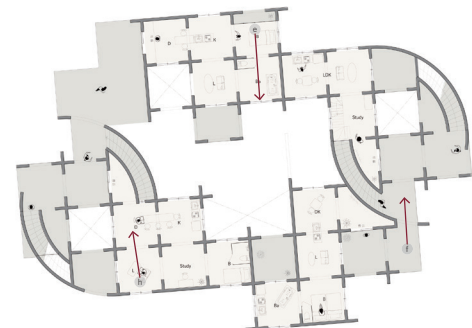
g 重なる開口の先に木が見えまなざしが生じる



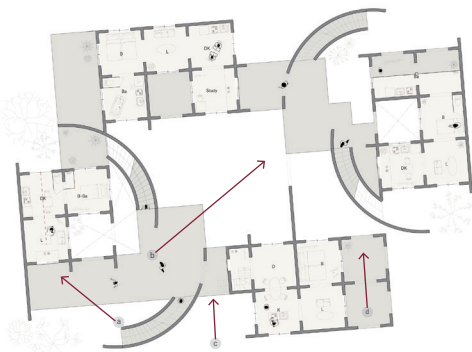
h 住戸内に対しても外部に対してもまなざしが生じる



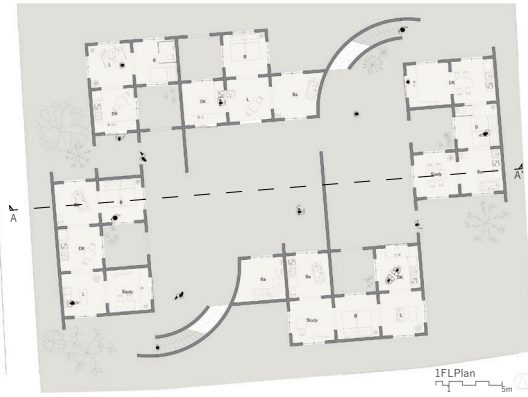
4FLPlan



3FLPlan



2FLPlan



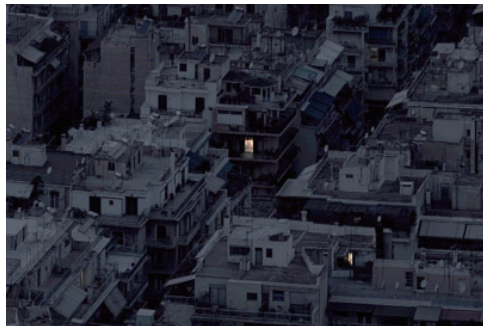
1FLPlan

01- 研究背景と目的

現代社会において、孤独が深刻な社会問題となっている。高齢者だけでなく、近年は若い世代の抱えている孤独について問題になることが多い。SNS やオンライン活動が増加する中で、表面的なつながりが増えても、心の深いつながりが不足していると感じる人が増えており、心の距離が広がるというジレンマが存在している。同時に、隣人の顔や名前を知らないまま過ごす人々も増えており、周囲の人間関係が希薄になっている。

このような社会では、周囲の人との関わりが希薄になることによる孤独感だけでなく個人の存在を意識する機会が減り、自分の身体と意識を結びつけることによって得られる充実感や幸福度の欠如が生じやすくなっている。一般的に、孤独感や充実感の欠如を補うためには社会全体のコミュニティの強化や、人間関係の構築が重要だと提唱されているが、他者との直接的なコミュニケーションがなくても補うことが可能だと考える。

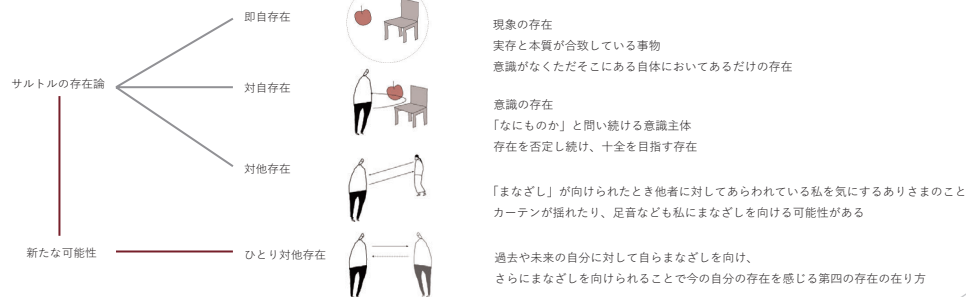
例えば、忙しい日常において、時間に追われ、同じルーティーンに従って家に帰る中で、突然自分の姿が電車の窓に映り、自身の存在に気づく瞬間がある。この時、自分の外側に向かっていた意識が突如自分の存在に向けられることで今ここにいる自分自身の身体と意識が結ばれる。物理的な身体と自己意識の結びつきが薄れることで、充実感を得ることが難しくなっている現代に、現在の自己認識に焦点を当てる機会を、建築によって作ることができるのではないだろうか。



アリストテレス・フアンスタジオ「alone together」(https://aristotele.photography/)

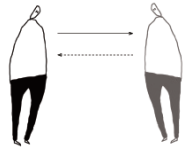
02- 存在論

サルトルが1943年に発表した『存在と無』によると、存在には3つの存在の仕方があるという。サルトルは私を私一人で対象化することは不可能であるとしたが、過去や未来の自分に対して双方向にまなざしを向けることで今の自分の存在を感じる第四の存在の在り方があると考える。



03- 自らのまなざしを感じた事例

自らのまなざしを感じた経験の事例から、受動的に見えているものと能動的に見えているものの差が空間の感情移入に重要であると考え、視覚の働きをもとに建築を分析する。

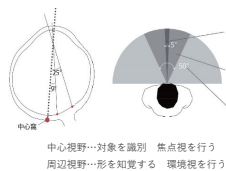


今ここにいる自分とは異なる時刻に存在する自分を想像することができると、私自身からのまなざしが発生
空間を知覚して向こう側を想像したり、過去を振り返ったりすることで自分中心でない領域がうまると、まなざしが生じる

04- 視野の先行研究

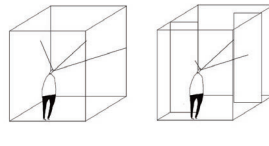
04-1 中心視野と周辺視野

既往研究では周辺視野で空間の知覚を行い、中でも視野の中間部から遠心高にかけての範囲に触れると、図形を知覚することができるということが分かっている。
そのため、本研究では、図のように中間周辺視野 50° を分析に用いた。



04-2 視覚的観点での考察

中心視野と中間周辺視野から得られる連続した視覚情報にギャップがあることが、空間のその先を想像させる。働きかけが視野のギャップから生まれる想像が、自分にまなざしを向けることにおいて重要である。まなざしを感じる建築と視野が捉えるもの関係を実際の建築事例を用いて分析し、自身の存在を意識できる建築を提案する。



05- 事例分析

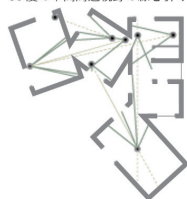
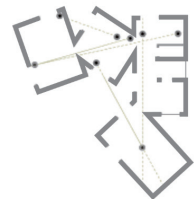
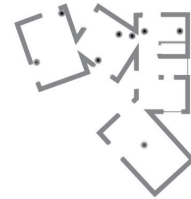
05-1 分析方法

建築を経験して生じた自分からのまなざしと、視野の関係を分析するために、調査する建築ごとに分析シートを作成した

まなざしが生じた場所をプロット

まなざしを結ぶ中心視の線を引く

まなざしの方向を0度として50度の中間周辺視野の線を引く

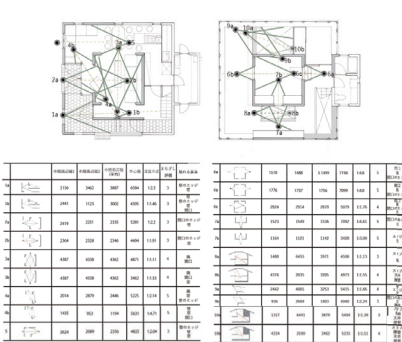


- 各建築に建築を体験してまなざしが生じた場所をプロットし、中間周辺視野がふれるまでの距離と中心視野が止まるまでの距離について計測
- 中間周辺視野が止まるまでの距離には左右差が出るため、左右の平均値を求める
- 中間周辺視野の左右の平均値を1としたときの中心視野の比の値を中間周辺視野と中心視野の深度の差として計算。
- まなざしをどれだけ感じたか相対評価で「1…感じなかった 2…意識するとすぐ弱い感じた 3…少し感じた 4…感じた 5…強く感じた」の5段階の評価をつけた。
- 中間周辺視野 50° の範囲に触れる要素についてまとめた。特殊なまなざしを感じた場所に関しては、視野の深度の差に関する分析は行わず、場所をプロットするだけに留めた

05-2 シートの作成

実際に行ったことのある建築の中から、まなざしが生じた建築と中間周辺視野に触れる要素が多そうな建築を取り上げ、全6建築64か所において生じるまなざしと視野の関係を分析した

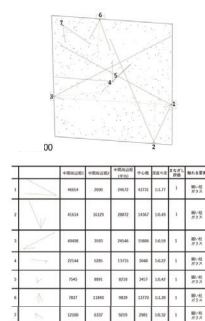
中心のある家 | 阿部勉



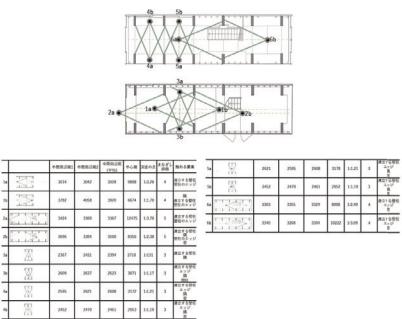
食堂の壁のはなれ、屋根と窓のある家 | 宮島子



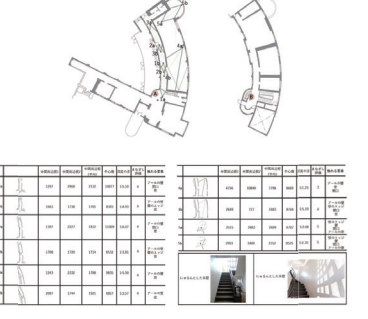
神奈川工科大学 KAIT 工房 | 石上純也



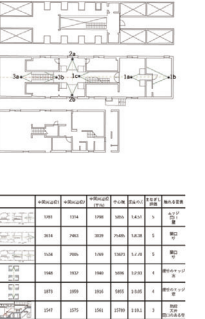
形張の山荘 | 宮島子



原美穂館 | 渡辺仁

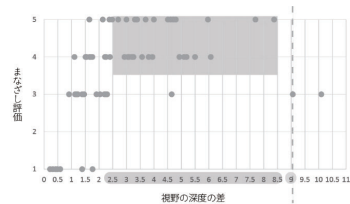


栗津部 | 原広司



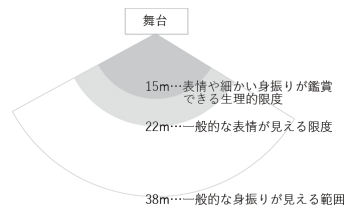
05-3 分析結果

まなざしの強さに関してつけた5段階評価と、中間周辺視野と中心視野の深度の差の相関関係を求めると、正の相関があった中間周辺視野の深度を1としたときの中心視野の深度が9を超えるともなざし評価が低くなった。



	深度の差	まなざし評価
深度の差	1	
まなざし評価	0.449383892571095	1

全国公立文化施設協会によると、劇場の設計では、人間の表情が見えることが観劇の上で重要になる。そのため、可視限界距離が設けられており、15mまでが表情や細かな身振りが鑑賞できる距離、22mまでが一般的な表情が見える限度とされている（公益社団法人 全国公立文化施設協会,2015）。表情が見える距離の臨界点と、ある一定の深度の差を超えるとまなざしを感じられにくくなる傾向の結果も踏まえて、ひとり対他存在を感じる建築を考える際に重要な基準となると考えられる



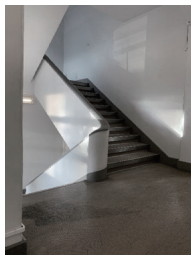
05-4-1 アールの壁

アールの壁と視野のギャップの関係は、円の大きさと廊下の幅に伴って変化する。中心視野が止まるまでの距離が可視限界距離以上だと自分の存在を想像することは不可能であり、ひとり対他存在は感じられない。そのため、すべてのアールの壁で一人対他存在が感じられるわけではなく、ギャップがなさすぎる場合もありすぎる場合もまなざしは感じられなくなっていくと考えられる。



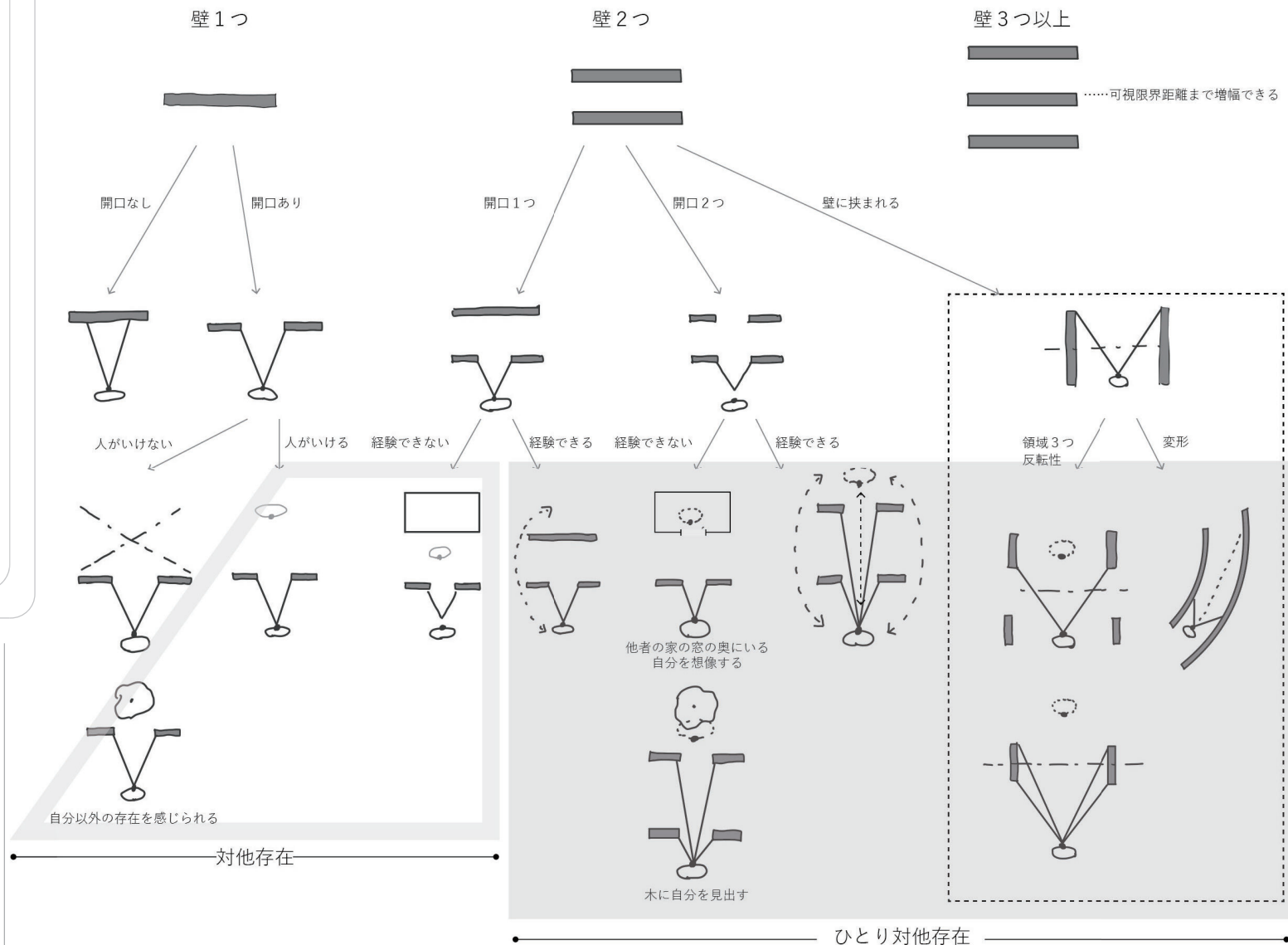
05-4-2 残触感

アールの壁や手摺を見てみると、手にフィットしそうなゆんゆんとした形状をしている。このようなディテールがまなざしを生むのは、触りたくなくなが、触っている自身の存在を想像させ、また過去に触った経験の記憶を思い起こさせるからだと考える。つまり、このようなディテールは目によって触った感覚を得られる残触感を誘発するためにまなざしが生じると考察する。



05-4 まとめ

これまでの事例分析をまとめ、ひとり対他存在が感じられる建築の構成を考察する



壁が1枚で開口のない場合

開口があっても人が存在していることを想像し得ない場合はまなざしが生じない。しかし開口の外に木などなにかの存在を感じ取れるときは対他存在が感じられる。

開口が一つでその先で捉える空間が経験できない場合: 対他存在を感じられ、開口の先で捉える空間が自分が経験できる場合は感情移入の度合いが強くなり一人対他存在を感じられる。

開口が2つの場合: 3つの領域を認識でき、感情移入の度合いが強くなるため一人対他存在を感じやすい

壁に挟まれる場合: 反転性によって3つの領域が生じるパターンとアールの壁に挟まれて深度の差がうまくいけばまなざしを感じるパターンがあったがすべてのアールの壁で一人対他存在が感じられるわけではなく、円の大きさと廊下の幅に伴って変化すると考えられる。

これらのまなざしと建築の構成は、可視限界距離まで増幅することができる

●06-1 プログラム

建築に身を置いたときに、他者や、他者がいてもいなくても自分からのまなざしを感じ、自身の存在に意識を向けることができる建築の提案を行う。
周囲との関わりが希薄になり、孤独感が生じるだけでなく、個人の存在に意識を向ける機会が減少している現代の課題に対し、単身者向けの集合住宅を設計する。

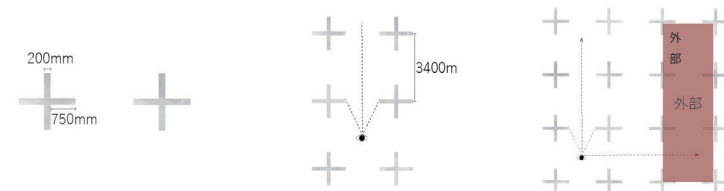
●06-2 敷地

敷地は東京都新宿区新宿6丁目とする。新宿区は、東京23区の中で最も単独世帯が多く、2020年の新宿区の国勢調査によると単独世帯が著しく増加し、2020年の時点では一般世帯の67.8%が単独世帯となっている。図15に示した新宿6丁目は新宿区のなかでも低層の住宅と集合住宅が混在して広がり、敷地の近くでも同様の特徴がみられる。



●06-3 住戸の設計ダイアグラム

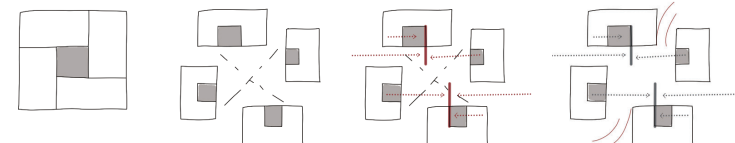
開口のある壁を交差させ、対他存在も一人対他存在も感じられるよう建築を構成



先が見えず、かつ人の居場所にもなるよう壁を750mmできるように交差させる

部屋真ん中に居るときに視野50°が一つのフレームに触れる3400mmを基準として門型の壁を配置する

自分の住戸内でのまなざしだけでなく、他者とのまなざしを生むため、2つ先に見える空間が外部にも向かうようゾーニング



2つの開口の先に自分の家も他者の空間も見えるように中庭を囲うように住戸を配置し、まなざしが都市にも向くようにずらす

可視限界距離を超えないように、まなざしを集める壁を配す

移動しながらもまなざしが生じるようアールの壁による共用階段を挿入

●06-4 建築全体の構成ダイアグラム

住戸内外を移動しながらも連続したまなざしが生じ、建物全体で自身の存在を意識できる構成

